

漢文とラテン語に対する俗語の正統化と遺産化

——『古今集』真名序とダンテ著『俗語論』を比較して⁽¹⁾

エドアルド・ジェルリーニ

The Legitimation and Heritagization of Vernacular through Kanbun and Latin
— A Comparison of *Kokinshū*'s Sinitic Preface and Dante's *De Vulgari Eloquentia*

Edoardo GERLINI

Abstract

Sinitic (kanbun) and Latin have functioned as lingua francas—or more precisely “scripta franca”—of the intelligentsia in East Asia and Western Europe, respectively, until the modern times. Long before Sinitic and Latin had lost their importance, vernacular languages started to be used for literary production, with the result of an enduring situation of diglossia in almost every country. When vernacular literature reached maturity, its legitimacy as “language of culture” started to be questioned, and various attempts were made with the aim to demonstrate its value.

This paper focuses on two of the most symbolic moments of the history of literature in Japan and Italy, namely the compilation of the *Kokin wakashū* (905) and Dante Alighieri (1265–1321)'s literary activity. Through the direct comparison between the *Kokinshū*'s Sinitic preface (*Manajo*) and Dante's treatise in Latin *De vulgari eloquentia*, the paper demonstrates the existence of a similar discourse on literature aimed at the self-legitimation of their authors' artistic view, with the explicit evaluation of *Kokinshū* and Dante's poetic style. The paper discusses three rhetorical strategies of legitimation adopted by the two works: the demonstration of the naturalness of vernacular compared to Sinitic and Latin; the reconstruction of an history of vernacular language and literature; and the “heritagization” of the past, namely the creative appropriation of style and poems from the great authors of the past canonized as models and direct inspirators of the new vernacular poetry by *Kokinshū*'s compilers and Dante.

はじめに

漢文は東アジアのラテン語なのか。この問題は先学によってつとに提起されてきたものである⁽²⁾。確かに、リングアフランカ、つまりトランスナショナルな共通言語⁽³⁾として普及した漢文とラテン語は、同様に政務や外交に欠かせない道具であるとともに、東アジアとヨーロッパにおける文化交流と宗教、哲学、文学などの発展の基礎であった。また、書記体系の発祥期から時代が下ると、のちに国家言語と呼ばれるようになったローカルな言語を利用する資料や作品がしだいに現れてくるが、長い間唯一の「文化の言語」として認められた雅語、つまり漢文とラテン語は、日常言語でもあった俗語と共存するようになる⁽⁴⁾。

(1) 本研究は、EU 委員会 Horizon 2020 “Marie Skłodowska Curie Actions” プログラム（契約番号 792809）の支援で行われた。本稿は、第 65 回国際東方学会議・東京会議シンポジウム「平安朝漢文学のテキスト遺産」（企画者：藤原克己）というパネルで発表する予定だったが、新型コロナウイルスの影響で中止。本稿の基礎となった比較研究の結果に関しては、拙稿『Heian Court Poetry as World Literature - From the Point of View of Early Italian Poetry』（Firenze University Press、2014 年）を参照されたい。この比較研究にあたって指導教官となっていた藤原克己氏に、この場をお借りして御礼を申し上げたい。また、草稿を読んでいただき、貴重な助言を下された河野貴美子氏に厚く感謝の意を表す。

ダイグロシア（二言語併用）と呼ばれる⁽⁵⁾この言語の共存関係は、東アジアとヨーロッパとにおいてそれぞれの特徴を有し、異なるタイミングで発展して終了するのであるが⁽⁶⁾、比較研究を行う価値がある重要な共通点だと考えられる。雅語と俗語は必ずしも対立するものではなく、それぞれの範囲、読者、目的を分け合いつつも、お互いに積極的な影響を与え合ったのである。しかし文学の場合、俗語の成長に伴い、雅語のテリトリーが削られることになると、やはり両者の間には緊張感が発生し、俗語文学の意義と価値が問われ、それを確かめようとする作者たちが現れる。

本稿では、以上の問題を比較文学の立場から考察するため、日本語文学とイタリア語文学の成熟期とされている時代に絞って、俗語文学の正統性を確かめる試みの一早い例だと考えられる次の二つの作品を分析する。一つ目は、仮名文学の声明書とも言える『古今和歌集』の序文、とりわけ紀淑望（?～919）が漢文で作成した「真名序」で、もう一つはイタリア文学の父と呼ばれているダンテ・アリギエーリ（Dante Alighieri, 1265-1321）がラテン語で綴った『俗語論（De vulgari eloquentia）』である。これらに加えて、「真名序」の翻訳だと考えられる紀貫之の「仮名序」も、適宜参照する。

当該作品の第一の共通点は、俗語文学の価値を証明するために、やはり雅語（漢文、ラテン語）を用いざるを得なかったということである。一方、大きな相違点もあり、それは和歌にもつばら集中する「真名序」と違って、ダンテの目的はより広い範囲で俗イタリア語そのものを検討し、ヨーロッパの他の俗語にも言及するのである。ただし、『俗語論』のほとんどは、俗イタリア語での詩（カンツォーネ）に集中し、散文と韻文の関係についても、韻文の優越を主張するのである（II-i-1）。したがって、後の文学史に与える影響を考えた点でも、「真名序」と『俗語論』の比較は十分に有意義だと考えられる。

当然、イタリアと日本における雅語と俗語の関係を比較するには、それぞれの根本的な違いに充分注意しなければならない。まず、ラテン語とイタリア語は直接的な親子関係であるのに対して、日本語と漢文⁽⁷⁾は基本的に起源をことにする。加えて、先行研究が論証した通り⁽⁸⁾、漢文とラテン語の最も重要な相違点は、会話な

(2) John T. Wixted 「Kanbun, Histories of Japanese Literature, and Japanologists.」 (『*Sino-Japanese Studies*』 10.2、1998年、23-31頁)、「“Literary Sinitic” and “Latin” as Transregional Languages: With Implications for Terminology Regarding “Kanbun.”」 (『*Sino-Platonic Papers*』 276、2018年、1-14頁)。David B. Lurie 「The Latin of East Asia?」 (『*Realms of Literacy: Early Japan and the History of Writing*』 Harvard University Press、2011年)。Wiebke Denecke 「Worlds Without Translation」 (Sandra Bermann; Catherine Porter 共編『*A companion to translation studies*』 Wiley、2014年、204-216頁)、「Shared Literary Heritage in the East Asian Sinographic Sphere」 (Wiebke Denecke、Li Wai-Yee、Tian Xiaofei 共編『*The Oxford Handbook of Classical Chinese Literature*』 Oxford University Press、2017年)。Peter F. Kornicki 「Having difficulty with Chinese? - the rise of the vernacular book in Japan, Korea and Vietnam」 (<http://www.dspace.cam.ac.uk/handle/1810/217831>、2009年)、「A note on Sino-Japanese: a question of terminology」 (『*Sino-Japanese Studies*』 17、2010年、29-44頁)、『*Languages, scripts, and Chinese texts in East Asia*』 (Oxford University Press、2018年)。

(3) 狭義では、漢文は言語ではなく、表記体系 (script) であるが、中世ヨーロッパのラテン語に関しても同じ理解ができるので、本稿では両者をともに「言語」とする。Wixted 前掲 2018年、2-5頁参照。

(4) 雅語と俗語は、漢文と和文を指す語としてやや適切ではないが、本稿では用語に関する検討を行わない。日本文学における vernacular / 俗語については Rebekah Clements 『*A Cultural History of Translation in Early Modern Japan*』 (Cambridge University Press、2015年) を参照されたい。

(5) ダイグロシアの最初の定義は Charles A. Ferguson 「Diglossia.」 (『*Word Journal of the linguistic circle of New York*』 15、1959年、325-340頁) による。日本も含めて多国文化を対象にする近年の先行研究には Judit Árokay、Darja Miyajima、Jadranka Gvozdanović 共編『*Divided Languages? Diglossia, Translation and the Rise of Modernity in Japan, China, and the Slavic World*』 (Springer、2014年) を参照されたい。ただし、Wiebke Denecke はダイグロシアも、リングアフランカも、東アジアの場合は不適切な用語であると指摘し、スクリプタフランカ (scripta franca) (前掲 2014年、209頁) やバイリテラシー (bilinguality) (『*Classical World Literatures. Sino-Japanese and Greco-Roman Comparisons*』、Oxford University Press、2014年、46頁) などの用語を提案した。Peter Kornicki は、ダイグロシアの代わりにダイグラフィア digraphia を提案した (前掲 2009年、4頁)。

(6) ヨーロッパと東アジアに出版された書物の言語の比率については、Lucien Febvre、Henri-Jean Martin 共著『*The Coming of the Book - The Impact of Printing 1450-1800*』 (NLB、1976年) 274頁と Kornicki 前掲 2009年、62頁を参照されたい。

(7) 先行研究が指摘した通り、漢文という言い方は非常に曖昧で、やや不適切であることを意識しているが、ここでは便宜的に用いる。Wixted 前掲 2018年を参照されたい。

(8) Kornicki 2009:9-10.

どの口頭伝達にも用いられていたラテン語と異なって、漢文は最初から書記言語としてしか使われなかったのである。また、Peter Kornicki が指摘したように、漢文と中国との間には緊密な関係がある。したがって、Classical Chinese、つまり漢文は「近世ヨーロッパにおけるラテン語のような政治的かつ外交的にニュートラルな言語になり得なかった」⁽⁹⁾。しかし一方、漢文はただ中国のものだけではなく、「東アジアの共有文学遺産」(shared literary heritage of East Asia) (Denecke 2017) として意識されていた事実を強調する研究が増えた (Lurie 2011:343-6, 352-3, King 2014:2-4, Kornicki 2018:17-8 などとも参考)。

ヨーロッパにおける *latinitas* (ラテン文化圏) という共有文化遺産の存続と意義についての論考は、東アジアの諸国における漢文の所有権と全アジアアイデンティティーの存在についての論考と重ねることができるが、これらを合わせて比較する視点から見ると、共通する問題に新たな照明を与えられる可能性が期待できる。例えば、前近代の知識層におけるトランスナショナルな言語とローカルな言語への意識はどのような形をとっていたのか。国境を超越する文化的アイデンティティーがあったのか。特に、同じようなカノンとカリキュラムを勉強していた東アジアの大学寮の学生と中世ヨーロッパのユニヴェルシタス (Universitas) の学生たちは、どのように自分の文化を考え、東アジアとヨーロッパという枠組みに位置付けていたのか。

本稿では、俗語の弁護を提唱する当該作品を比較することによって、普遍的な文化に対するローカルな文化への自己意識のある段階の様相を明らかにしたい。結論から述べると、「真名序」と『俗語論』の原文を分析した結果、紀淑望とダンテ・アリギエーリが成した俗語正統化の言説は、次の三つの作戦によって遂行されることが分かる。1) 俗語の自然性を論証する。2) 俗語の歴史を語り直す。3) 過去の文学を遺産化する。ただし、この三つの作戦の最終目的は、全ての俗語文学を正統化することではなく、ダンテと淑望の理想に適合する作品、つまりダンテ自身と『古今集』撰者たちの詩歌だけを新しい文学のスタンダードとして定着させたいという姿勢が明らかであり、それこそが重要な共通点であると論証したい。

「真名序」と『俗語論』

紀淑望によって綴られた「古今和歌集 真名序」は、醍醐天皇の勅命で編纂された最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の序文である。その主な目的は、日本文学がまだ主に漢文で書かれていた当時において、和歌の権威を論証することであるが、そのために選ばれたのは、大学頭や東宮学士という官職を重ねて、儒者としての業績が認められていた淑望である。おそらく、歌人としてのみ評価されていた『古今集』の撰者たちよりも、漢文の序文を記すのにふさわしい人物だと判断されたのだろう。ところで、「真名序」以前にも日本語での詠歌をめぐる歌学書はあったが⁽¹⁰⁾、後の日本文学史を展望すると、「真名序」の影響は明らかに画期的であった。

『俗語論』とは、イタリアの詩人・理論家ダンテ・アリギエーリが、故郷のフィレンツェから流罪されて直後、1304～7年の間に作成したラテン語での論文である。全四編から成る予定であったが、第二編 14 章で中断した。その内容は、ヨーロッパ諸言語を源流にさかのぼって検討する一方、イタリア諸地域の方言を 14 に分類し、文学に最もふさわしいイタリア語を探究するものである。ダンテが定義する理想の俗語 (*vulgari*) とは、光輝ある言語 (*illustre*)、つまり高貴で洗練された表現を使うべきであり、そして宮廷的 (*aulicum*) と法廷的 (*curiale*)、つまり君主の宮廷と政務や法律の場にふさわしいものであり、そして基本的 (*cardinale*)、つまり各地の方言や言語の主な参考となり、方向付けを担う言語である。ダンテは、『俗語論』の後半で散文と、高貴ではない、下品な俗語についても論じる予定だったと推定できるが、中断したため、最も上品な詩形とされていたカンツォーネという韻文の論説と作詩方法にとどまる。『俗語論』が流布し始めたのは、成立から二百年も後だが⁽¹¹⁾、ラテン語に対するイタリア文学の論考史では重要な参考文献になっている。

先述した通り、雅語と俗語の関係ははっきりした対立ではなく、複雑で相互に依存する関係のように考える

(9) «Chinese after all belonged to China: it was not, and never could be, a politically or diplomatically neutral language like Latin in the context of early-modern Europe», Kornicki 前掲 2009, 9 頁 (和訳は筆者による)。

(10) 「仮名序」と「真名序」より以前のものとしては、『歌経標式』、『倭歌作式』、『和歌式』、『石見女式』、『新撰万葉集序』などを列挙できる (佐佐木信綱編『日本歌学大系』第 1 巻 1957 年参考)。

(11) Piergiorgio Ricci と Pier Vincenzo Mengaldo 「De vulgari eloquentia」(『Enciclopedia Dantesca』Treccani, 1970 年)。

べきだが、「真名序」と『俗語論』にもその絶妙な緊張感が見られる。『古今集』の編纂を分岐点に、平安朝文学は漢文から和文へと一変したという古い通説は修正されたが⁽¹²⁾、やはり「真名序」には、漢詩と漢文の首位を奪おうとするある程度の野心を見出すことができよう。Gian Piero Persiani が指摘した通り、『古今集』は「アンチ漢文のマニフェスト」とまでは言えないが、その序文では、和歌の価値を確かめるための「アンチ詩の主張」がある程度含まれていることは否定できない⁽¹³⁾。

日本文学における和と漢の関係の把握は困難な課題⁽¹⁴⁾であるが、ダンテにおけるラテン語と俗語の関係も複雑な形をとっている。『俗語論』では、俗語の優先性が主張されるが、『饗宴 (Convivio)』というもう一つのダンテの作品では、ラテン語が「(俗語) より美しく、高潔で、高貴である (più bello, più virtuoso e più nobile)」(Convivio 1-V-14) と述べている。ところで、この『饗宴』は、ラテン語ではなく、俗イタリア語で書かれたもので、ラテン語を読めない一般の読者向けであった。その内容は『俗語論』と大きく異なっているが、俗イタリア語でも重大な課題を論じられることを証明するのである。

この点に関しては、「真名序」の内容を和文に訳しながら拡大する紀貫之の「仮名序」に共通するところがある。前田雅之⁽¹⁵⁾が指摘した通り、「仮名序」の文体には不自然なほど精巧な表現があるが、それは漢文の韻文に勝る高度な和文スタイルを定着させようとした貫之の計画であった。「仮名序」の文体は日本語のスタンダードにはならなかったが、当時の和文の限界を越えようとする姿勢は、『饗宴』に似ている。

このように、『俗語論』と「真名序」に共通する出発点は、俗語が文学⁽¹⁶⁾にふさわしい言語として認められていなかった状況に反抗することである⁽¹⁷⁾。その状況をひっくり返すために、『俗語論』も「真名序」も同じような作戦を仕組んだということが、本稿が述べようとする主な仮説である。

俗語の自然性を宣言して

『古今集』両序文の冒頭部は、歌は人間のみならず、神々や動物などにも行われる自然な活動であると主張する。「真名序」によると、和歌は「その根を心という大地に託することによって、その花を詞の林に咲かせるものである」⁽¹⁸⁾、つまり植物のように成長する生き物に例えられる。そして生きている限り、人間は何もしないで済むことはできないと述べている。

夫和歌者、託其根於心地、発其華於詞林者也。人之在世、不能無為。(第一節)⁽¹⁹⁾
それ夫、和歌ハ、其ノ根ヲ心ノ地ニ託ケ、其ノ華ヲ詞ノ林ニ発ク者也。人ノ世ニ在ルヤ、無為ナルホト能ハズ

また、歌に気持ちを託すのは、鶯や蝉などの万物に通用する原則、つまり「自然の理 (ことわり)」だと強

(12) 例えば、滝川幸司(『天皇と文壇—平安前期の公的文学』和泉書院、2007年)が論証したように、古今集のあと漢詩を中心とした宮廷の行儀などが盛んに行われていた。

(13) «The Kokinshū was not in any way, nor should it be read as, a manifesto pro vernacular literature and against literature in Chinese. Anti-shi arguments are made in the Prefaces, as we have seen, but primarily as rhetorical expedients to affirm the value of waka.» (Gian Piero Persiani 「China as Self, China as Other. On Ki no Tsurayuki's Use of the wa-kan Dichotomy」『Sino-Japanese Studies』23、2016年、31-58頁) 44-5頁。

(14) 英語での先行研究のまとめは、Persiani (前掲2016年)を参照されたい。平安初期に関しては、北山円正等共編『日本古代の「漢」と「和」嵯峨朝の文学から考える』(勉誠出版、2015年)もある。

(15) 前田雅之『なぜ古典を勉強するのか 近代を古典で読み解くために』(文学通信、2018年) 162頁。

(16) この時代の「文学」という用語自体にも問題があり、これについて河野貴美子等編『日本「文」学史』全三冊(勉誠出版、2015~2019年)の各序文などを参照されたい。

(17) Wixtedによると「The fact that the value of Japanese poetry is strongly asserted reflects a distrust of that value—at least a distrust of the acceptance of that value at the time」。John T. Wixted 「The Kokinshū Prefaces: Another Perspective」(『Harvard Journal of Asiatic Studies』43 (1)、1983年、215-238頁) 217頁。

(18) 片桐洋一『全註釈古今和歌集』講談社2019、280頁。

(19) 『古今集』の引用文は、前掲の片桐書に依る。

調する。

若夫春鶯之嚶花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠。物皆有之、自然之理也。(第二節ノ一)
 若シ、夫、春ノ鶯之花ノ中ニ嚶り、秋ノ蟬之樹ノ上ニ吟ズルハ、曲折無シト雖も、各歌謠ヲ發す。物
 二皆之有ルハ、自然ノ理也。

「自然」という単語は「仮名序」にはないが、同じような概念が見出せる。ここでいう自然、つまり「自ずから然る」という表現は、必ずしも現代語で言う Nature とは一致しないものであろうが、押しつけなしに、自ずから発生するものとして解釈できる。

一方、ダンテの『俗語論』の焦点は、イタリアの歌ではなく、言語としての俗イタリア語であるが、自ずから発生する現象という側面では、「真名序」における和歌の自然性と近似する。

quod vulgarem locutionem appellamus eam qua infantes assuefiunt ab assistentibus cum primitus distinguere voces incipiunt; vel, quod brevius dici potest, vulgarem locutionem asserimus quam sine omni regula nutricem imitantes accipimus. (I-i, 2)

子供が最初に音声に分節発音しはじめるとき、まわりの人々から習いおぼえる行為を俗語の言語活動と呼ぶことにする。さらに手短かにいうならば、乳母のまねをしつつ、なんの規則もなしに学びとる行為を俗語の言語活動とみなすことにする。²⁰⁾

「真名序」に取り上げられている歌は、人間、動物、神などに共有されている普遍的な言語のように見えるのとは異なり、ダンテの俗語はただ人間のみに所属する能力である。動物はもちろん、天使たちなどにも言語というものは要らないからである。

Hec est nostra vera prima locutio. Non dico autem "nostra" ut et aliam sit esse locutionem quam hominis: nam eorum que sunt omnium soli homini datum est loqui, cum solum sibi necesz sarium fuerit. Non angelis, non inferioribus animali bus necessarium fuit loqui, sed nequicquam datum fuisset eis: quod nempe facere natura aborret. (I-ii-1, 2)

これこそわれわれの真の最初の言語活動である。「われわれの」というのは、なにも人間の言語活動以外にそれが存在するという意味ではない。事実人間のみに必要であったがゆえにすべての生物のなかで人間のみに言語活動が与えられたのであるから。天使や人間に劣る生物にはそのような活動は不必要であった。たとえかれらにそれが与えられたとしても無益であったに相違ない。そのような無益な行為を自然は嫌うからである。

スコラ学とアリストテレス主義に基づくダンテの世界観によると、本能によって動く動物と異なって、人間は知能によって活動するのであるが (I-iii-1)、この知能は「自然」と対立せず、人間の自然な本質の一つである。したがって『俗語論』と「真名序」が言及する自然の規則は同様に見えても、やはりそれぞれの論説は根本的に異なる哲学理論と思想体系に基づいていることに注目したい。

もう一つ重要な相違点は、ダンテが他の言語の存在も視野に入れているのと違って、「真名序」はもっぱらやまとの歌だけに集中することである。日本以外の詩への唯一の言及は「仮名序」にある「そもそも、うたのさま六つなり。漢詩（からうた）にもかくぞあるべき」という箇所であろう。『詩経』「大序」の六義を模すこの「うたのさま」が、偶然漢詩にも存在したかのような、曖昧な言い方で、その理論の起源を隠しているように見える。

²⁰⁾ 『俗語論』からの引用文（ラテン語と日本語）は岩倉具忠訳註『ダンテ 俗語詩論』（東海大学出版会、1884）に依る。

逆に、ダンテはイタリア語の系統を慎重に遡ると同時に、ラテン語の性格についても言及する。

Est et inde alia locutio secundaria nobis, quam Romani gramaticam vocaverunt. Hanc quidem secundariam Greci habent et alii, sed non omnes: ad habitum vero huius pauci perveniunt, quia non nisi per spatium temporis et studii assiduitatem regulamur et doctrinamur in illa. (I-i-3)

われわれはこの俗語の言語活動から派生したもうひとつの二次的言語活動をもっており、それはローマ人たちが文法と呼んでいたものである。こうした二次的言語活動は、ギリシャ人や他の民族が所有するところであるが、すべての民族が所有するとはかぎらないのである。しかもそれを完全にわがものとする人はわずかにすぎない。実にこの言語活動においてその規則と知識をわがものとするには十分な時間をかけ、習練をまたねばならないからである。

ダンテがグラマティカ（文法）と名付けるものは、ラテン語そのものではなく、人工的で、ルールが定められたあらゆる古典語というカテゴリーである。口頭言語である俗語と、もう会話には使われていないグラマティカという区別には、言語の通時的な進化に対する意識が見られる。ところで、ダンテによるこの自然的言語と人工的言語の区別は、Ferguson が最初に定義したダイグロシアに当てはまるところがあるが、ここで注目したいのは、ダンテの視点から見ると、おそらく漢文もグラマティカというカテゴリーに入るものだと考えられることである。

さて、「真名序」も『俗語論』も、俗語（歌）の優先性を次のようにはっきりと主張する。

動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌。（第一節）

天地ヲ動カシ、鬼神ヲ感ゼシメ、人倫ヲ化シ、夫婦ヲ和スルコト、和歌ヨリ宜シキハナシ。

Harum quoque duarum nobilior est vulgaris: tum quia prima fuit humano generi usitata; tum quia totus orbis ipsa perfruitur; licet in diversas prolationes et vocabula sit divisa; tum quia naturalis est nobis, cum illa potius artificialis existat. (I-i, 4)

これら二つの活動のうちより高貴なのは、俗語の言語活動である。それは人類が最初になじんだものであり、たとえ多様な音声要素と語いに分化していようとも、いまなお世界中がそれを用いているからである。また一方がどちらかといえば人為的であるのに対し、他方は自然だからである。

和歌に認められている天空を動かす力はないが、ダンテの俗語にも人間の心を左右する、つまり感動させる力が備わる点において「真名序」と共通している。

Quod autem exaltatum sit potestate, videtur. Et quid maioris potestatis est quam quod humana corda versare potest, ita ut nolentem volentem et volentem nolentem faciat, velut ipsum et fecit et facit? (I-xvii-4)

そしてそれが（表現の）能力によってたかめられることは明白である。また望まざるものを望むものに、望むものを望まざるものに変えるぐらいに人間の心を自在に動かす（それは俗語が過去においてもそうして来たとし、現在においてもそうし続けているが）能力にまさる能力が存在するであろうか。

ダンテによると、この俗語の力は、その自然性に由来するものである。Mengaldo が指摘した通り⁽²¹⁾、これもまた「技巧に勝る自然」というスコラ学・アリストテレス主義の規則による考えである。一方、「真名序」による和歌の力も自然から生まれるものと解釈ができるが、これも『詩経』『大序』などの中国思想に由来す

(21) Pier Vincenzo Mengaldo 「De vulgari eloquentia. Introduzione」『Dante Alighieri – Opere Minori』第二巻、Riccardo Ricciardi Editore、1979年、7頁参照。

る考えである。淑望もダンテも、全く異なる学問に基づきながら、「自然」という普遍的な要素をそれぞれの論点を支えるために用いていることに注目したい。

ところで、「真名序」には「自然的な言語」と「人工的な言語」というはっきりした対立は見られないが、「心と詞」という理念の中には、ある程度このような二面が見出せる。

ともかく、俗語／和歌は自然だからこそ優れているという言説は、『俗語論』と「真名序」に共通する第一の作戦であると主張したい。

俗語の歴史を語り直して

ダンテと淑望が進める俗語の正統化の第二の作戦は、俗イタリア語と和歌の歴史を語り直すことである。神代から現在に至る途中でグラマティカ／漢文の導入を描写するこのナラティブは、『俗語論』と「真名序」の中で重要な位置を占めている。

「真名序」による和歌史は、次の8段階に分けることができる。

- 1) 歌が存在しなかった時代。
- 2) 須佐之男命（素戔嗚尊）が初めて31字の歌を詠む。
- 3) 人間の時代に歌のジャンルが増える。
- 4) 大津皇子が初めて詩賦（漢詩）を導入し、却って和歌が衰え始める。
- 5) 漢詩文に抵抗する柿本人麻呂と山部赤人が和歌の黄金時代を代表する。
- 6) 公の場から消えた和歌の墮落期。
- 7) 古い和歌の作り方を知る六歌仙の時代。
- 8) 『古今集』が編纂された醍醐朝の現在（和歌のルネッサンス）。

「仮名序」は、「真名序」の史観にいくつかの例や詳細を加えながら、同じような展開を示している。

一方『俗語論』で俯瞰されている俗語史は、これより複雑で、より広い世界を含む。ダンテの論説は、世界中の言語の起源から、イタリア半島の諸方言の詳細な検討まで、普遍から特殊へと進行する。「真名序」との相違点は多いが、黄金時代→没落→復活という流れは『俗語論』にも見出すことができる。

まず、「真名序」は和歌の発明を神の須佐之男命にまで遡らせるが、ダンテも『旧約聖書』を踏まえて、言語の発祥を神の御前で起こったと論証する。ただ、初めて言葉を発したのは、神ではなく、最初の人間アダムであったという。そしてまた、最初に発せられた言葉は「エル (El)」つまりヘブライ語で「神」だった (I-iv-3, 4) という論述から、ヘブライ語は原始で、聖なる言語であると結論する (I-vi-7)。ところで、ダンテによると、言語を使ったのはアダムが一人で、言葉にならず自分の意思を伝えることのできる神は言葉を話さなかったことを強調する (I-vi-5, 6)。おそらく、ダンテの思想における神と人間の距離は、日本における神と人々の距離よりもその懸隔は甚だしいものであったと推定できる。

『聖書』を踏まえて続くダンテの言によると、それからヘブライ語は、バベルの塔のエピソードまで、世界中の唯一の言語であった。バベルの塔を作ろうとしたという傲慢の大罪を犯した人間は、言語の混乱という天罰を受け、様々な民族に分けて各地に散らされてしまう (I-vii-4～8)。このエピソードは、『俗語論』のタイムラインにおける「墮落」の段階に当たると考えられる。聖なる言語ヘブライ語だけが存在していた黄金時代から、言語が乱れる時代に陥ったのである。少し強引な比較かもしれないが、「真名序」でも、和歌の墮落の原因とされている漢詩（詩賦）の導入に、モノリンガル環境から多言語環境へという「乱れ」が暗示されているのではないかと考えられる。

続いて、ダンテはヨーロッパの言語の起源を語り、またオック語 (oc)、オイル語 (oil)、シ語 (si) というロマンス諸語の分析を行う (I-viii-5)。その後、いよいよイタリアの俗語に集中するが、これは一つの言語を意味するものではなく、地方によって14種もの方言に分かれている諸語である (I-x-4～6)。ここで注目したいのは、『俗語論』には、俗語の多様性のみならず、時代に連れての変化もはっきり意識しているということである。これも、「真名序」にはほとんど現れない側面であろう。

Si ergo per eandem gentem sermo variatur, ut dictum est, successive per tempora, nec stare ullo modo potest, necesse est ut disiunctim abmotimque morantibus varie varietur, ceu varie variantur mores et habitus (I-ix-10)

したがって同一国民の言語が前述のごとく時間の経過とともに変化し、けっしてそのままとどまることはありえないとすれば、必然的に別々に遠くはなれて住む人々にあって、言語は多種多様に分化する結果となる。

そして、この状況に反抗するために、前節で紹介したグラマティカ（雅語、特にラテン語）、つまり規則化された不変の言語が作られたという。

que quidem gramatica nichil aliud est quam quedam inalterabilis locutionis ydemptitas diversibus temporibus atque locis. Hec cum de comuni consensu multarum gentium fuerit regulata, nulli singulari arbitrio videtur obnoxia, et per consequens nec variabilis esse potest. Adinvenierunt ergo illam ne, propter variationem sermonis arbitrio singularium fluitantis, vel nullo modo vel saltim imperfecte antiquorum actingeremus auctoritates et gesta, sive illorum quos a nobis locorum diversitas facit esse diversos. (I-ix-11)

この文法こそは、時代や所の差違にもかかわらず、変らないある種の言語活動の同一性にほかならない。この文法は多くの民族の一致した合意にもとづき統制されたものであるから、いかなる個人の恣意にも屈しないようにみえる。それゆえに変化しえないのである。したがって個人個人の恣意によってゆれ動く言語変化のために古代の人々や地理上の相違でことばの通じない人々の哲学的著作や武勲の物語を皆目、もしくは不完全にしか理解できないという事態が起ころぬようにこの文法をかれらは編み出すにいたったのである。

ダンテによると、グラマティカの主な役割は、古代の著作と物語を伝える、つまり古代の文化との接触を可能とすることである。その人工的で、獲得しにくい言語は、エリートの特権的リテラシーになるが、これは大津皇子によって導入された漢文にも相当する描写である。しかし、「真名序」で否定的に扱われている漢詩文と違って、ダンテにとっての雅語文化への尊重と憧れは率直に認められている。詩人のホラティウスやウェルギリウス (II-iv-4, 10)、哲学者のアリストテレスや征服者のアレクサンドロス大王 (II-vi-2)、また学者のティトゥス・リウィウス、プリニウス (II-vi-7) などの名前が次々と列挙される。グラマティカの発明は、過去へつながるための工夫であり、ラテン語で書かれた『俗語論』はその知識と学問を生かした作品でもある。

それから、ダンテより半世紀前に活躍していたシチリア詩派の詩人たちの称賛と、ダンテの同時代の詩人の批判にたどり着くが、これは次節に検討する過去文化の遺産化と繋がるのである。

以上、「真名序」と『俗語論』の史観は大きく異なっているが、上昇と没落というナラティブは共通しており、それに基づいて、ダンテと古今集の撰者たちは自分の新しいスタイルを、正しい詩歌のルネッサンスと見做し、正統化しようとするのである。

過去の文化を「遺産化」して

前節に述べた通り、過去の偉大な人物や優れた作品とのつながりを強調するのは、文学の土壤に新しく登場する作者たちが頻繁に行う自己正統化の作戦である。崇拝される過去のモデルと同一化することによって、新世代の詩人たちは自分の新しいスタイルと嗜好を定着させようとし、首位を争う。この過程を、「文化の創造的私物化」として捉え直し、「遺産化」の一例として考えられることについては、別稿ですでに述べた²²⁾。文化遺産をめぐる最新研究によると、遺産とは、過去の優れた文化的生産物そのものを指すよりも、過去の文化を引き継ぎながら現在での文化的アイデンティティを再創造するという複雑なプロセスであるとされている。

²²⁾ Edoardo Gerlini 「平安朝文人における過去と現在の意識」『第43回国際日本文学研究会集會會議録』国文学研究資料館、2020年。

「遺産化 (heritagization)」⁽²³⁾とも呼ばれているこのような過程・営為は、20 世紀の所産だと思われがちであるが、実は世界史においてはつねづね行われていたと考えられる⁽²⁴⁾。『俗語論』と「真名序」はその遺産化の二例にすぎないが、イタリアと日本の詩歌が初めて対象になっているところから、両国の文学遺産の歴史に重要な位置を占めていることが分かる。

当該作品には、二つの遺産化プロセスが認められる。

- 1) ラテン語と漢文の伝統に由来する理論を再利用すること。
- 2) 過去の俗語歌の優れた例を指摘し、その伝統を受け継ぐ相続者であると自負すること。

すでに指摘したように、「真名序」では、中国文学に由来する様々な理論が再利用されている。Denecke が指摘した通り、平安初期の「経国集序」にも「中国文化の積極的な私物化 (active appropriation)」が「新興の文学に歴史的深度を与える」⁽²⁵⁾ために発揮されたが、中国の典拠を一つもあげない「真名序」ではそれがまるで許可無しの私物化に見える。そもそも、先行研究が論証した通り、『古今集』の序文には、新しい文学論はほとんど論じられていない⁽²⁶⁾。『詩品』を踏まえる六歌仙の批評も⁽²⁷⁾、曹丕の『論文』の変容も⁽²⁸⁾、ただ中国のモデルを受け取った上で、文学の表現力を強調するだけである。しかしこれは、中国文化を尊重したいのではなく、中国の文学遺産を受け継いで、変容させたことで、和歌の正統化という個人的なニーズに応えるという淑望がとった論証のための作戦である。

『俗語論』にもちょうど同じ側面がある。先行研究が指摘したように、ダンテは、キケロの『De inventi-one』、ホラティウスの『Ars poetica』、ブルネット・ラティニーニ (1220-1294) の『Tresor』と『Tresoretto』などの先行論文を模範とし⁽²⁹⁾、スコラ学の技巧を発揮し⁽³⁰⁾、哲学の様々な著作をレパートリーとして再利用したのである⁽³¹⁾。ただ、典拠を全く明記しない「真名序」と違って、ダンテは過去の知恵を借りて、自分の才智と混ぜるとはっきり告白する。

non solum aquam nostri ingenii ad tantum poculum aurientes, sed, accipiendo vel compilando ab aliis, potiora miscentes, ut exinde potionare possimus dulcissimum ydromellum. (I-i-1)

ついては巨大な器におのれの才智を注ぎ込むばかりではなく、他の人々からももらい受け、集めて最良のものを混ぜ合わせ、こよなく美味な蜜の汁がその器から飲めるようにとはからうつもりである。

論理的なレベルでは、『俗語論』も「真名序」も斬新な作品だとは言えない。しかし、Ricci と Mengaldo は、「学問的な理論は、初めて個人で行われている作詩活動と、それに適合させた伝統から直接に生み出す」⁽³²⁾という点で、『俗語論』の特徴を指摘する。つまり、『俗語論』の理論家であるダンテは、詩人であるダンテの詩を

(23) Cristina Sánchez-Carretero 「Significance and social value of Cultural Heritage: Analyzing the fractures of Heritage」 (Miguel Ángel Rogerio-Candelera 等共編『Science and Technology for the Conservation of Cultural Heritage』 Taylor & Francis, 2013 年、387-392 頁)。

(24) David Harvey はこれに関して「遺産史」 (History of heritage) を執筆する必要があると述べている。Harvey, David 「Heritage Pasts and Heritage Presents: temporality, meaning and the scope of heritage studies」 『International Journal of Heritage Studies』 7:4、2001 年、319-338 頁。「History of Heritage」 (Brian Graham と Peter Howard 共編『The Ashgate Research Companion to Heritage and Identity』 Ashgate, 2008 年、19-36 頁)。

(25) Wiebke Denecke 「Chinese Antiquity and Court Spectacle in Early Kanshi」 (『The Journal of Japanese Studies』 30, 1、2004 年、97-122 頁) 97 頁。和訳は筆者による。

(26) Wixted 前掲 1983 年、238 頁。

(27) Wixted 前掲 1983 年、232 頁。

(28) Wiebke Denecke 「Prefaces as Sino-Japanese Interfaces - The Past, Present, and Future of the Mana Preface to the Kokin wakashu」 (『日本漢文学研究』 (3)、386-358、2008 年) 374 頁。

(29) Ricci & Mengaldo 前掲 1970 年。

(30) Giorgio Bàrberi Squarotti 等共著『Opere minori di Dante Alighieri』 第一巻、UTET、1983 年 357 頁。

(31) Bàrberi Squarotti 前掲 1983 年、368 頁。

(32) Ricci と Mengaldo 前掲 1970 年。

正統化させるだけではなく、逆にダンテの生の作詩経験に基づいて『俗語論』の理論的構造が組み立てられている、ということである。確かに、『俗語論』の中で引用されている15首の詩の中では、8首もがダンテ自身の作であり、それら全てが「光輝ある俗語」の正しい例として挙げられている。ダンテのその新しいスタイルに権威を与えるために、『俗語論』は古代の偉大な例から、近代の南仏やイタリアの諸論まで、網羅的にそして創造的に引用する。

ダンテと同様に理論家と詠歌の実践者という両面を持っているのは、102首もの和歌を自ら『古今集』に収載した紀貫之であろう。貫之が「仮名序」という歌論においてスタンダードなものとして定着させようとしているのは、彼と他の撰者たちの詩学にほかならない。この姿勢は、平安初期の勅撰漢詩集には既にあったが、『古今集』では、新たな段階に発展したと考えられる。歌の自然性などの中国理論を借りながら、心と詞のバランスという理念を軸にする撰者たちの新しい美学が普遍的なルールとして定められるのである。

その撰者たちの生の詠歌経験に基づく美学は、六歌仙などの過去の和歌を再批評するための基準になり、新しい和歌集の方針でもある。この再批評は、「真名序」における二つ目の遺産化に当たる。まず重要なのは、『万葉集』との関係、つまり『古今集』は『万葉集』の「続き」として生まれたことである。真名序でははじめ「家集」や「古来の旧歌」を集めたものを「続万葉集」と名付けたとある。

爰詔〔省略〕各献家集并古来旧歌、曰続万葉集。(第四節ノ二)

爰ニ〔省略〕詔シテ、各家集并ニ古来ノ旧歌ヲ献ゼシメ、続万葉集ト曰ハシメタマフ。

しかし、『続万葉集』という題目を放棄して『古今和歌集』になった瞬間、ただの継続ではなく、過去を吸収しながら新しい作品が生み出されたことが宣言されたのである。しかし、「真名序」の論説上行われている古歌の私物化は、『古今集』の本文、つまり細部まで整理された入集歌の構造にも実現されている。古歌は、四季と恋という二極に分かれる部立ての中に編入されることによって、ただ複製され、保護されるだけではなく、そのすぐ隣に列挙される撰者たちなどの新しい歌と響き合っ、共に鑑賞されるようになる。撰者たちは、和歌の伝統に新しい読み方を付与させ、『古今集』という新しいマクロテキストを再創造することによって、過去の歌人たちを蘇らせる一方、その伝統の権威を私物化し、自分たちの新しい詠歌スタイルを正統化させる結果になるのである。

『俗語論』にも、同じような過程が見出せる。俗語の歴史を語り終わったダンテは、イタリアの様々な俗語を検索して、光輝ある俗語を探し始める。イタリアの各地方で使われている俗語のほとんどは厳しく拒否されるが、その中にはいくつかの良い例外も取り上げられる。まずダンテから尊重されたのは、13世紀前半に神聖ローマ帝国の皇帝フリードリヒ2世の宮廷で盛んになったシチリア詩派(Scuola siciliana)の詩人たちのイタリア語である。

Sed quamvis terrigene Apuli loquantur obscene comunitur, prefulgentes eorum quidam polite locuti sunt, vocabula curialiora in suis cantionibus compilantes, ut manifeste apparet eorum dicta perspicientibus, ut puta "Madonna, dir vi voglio", et "Per fino amore vo si letamente". (I-xii-8)

しかしながらアプーリア出身の人々が一般に品の悪い話しぶりをするとしても、かれらのなかで傑出した詩人たちは、その詩を吟味するものには明白なごともっとも格調の高い語いを選びすぐってそのカンツォーネをうたいあげ、実にみやびな表現を用いている。たとえばこうである。Madonna, dir vi voglio (マドンナ、あなたのために歌おう)、Per fino amore vo si letamente (まったく愛の力ゆえわれげに楽しき世を送る)

その次に、光輝ある俗語のモデルとして認められるのは、ポロニアの詩人たち、特にグイード・グイニツェリ(Guido Guinizelli, 1237-1276) (I-xv-6) である。グイニツェリは、若きダンテも参加していた清新体

(Stilnovo) という文学運動の最初の主唱者で、ダンテにとって詩の師匠のような人物であった。そして最後に、ダンテの故郷でもあるトスカナ州から、高貴な俗語を使いこなした詩人の例を挙げる。

Sed quanquam fere omnes Tusci in suo turpiloquio sint obtusi, nonnullos vulgaris excellentiam cognovisse sentimus, scilicet Guidonem, Lapum et unum alium, Florentinos, et Cynum Pistoriensem, quem nunc indigne postponimus, non indigne coacti. (I-xiii-4)

しかしほとんどすべてのトスカナ人たちがおのれの醜悪な言語に麻痺しているというのに、俗語のすぐれた点をわきまえている人をわたしは何人か知っている。いずれもフィレンツェ人のグイード、ラーポと他の一人および都合により、不都合にもその名をあとに連ねることになったチーノ・ダ・ピストイアがそれである。

いよいよここでは、ダンテの自己正統化の願望が明瞭になる。優れている人として指摘されているこのグイード、ラーポとチーノは、ダンテとともに活躍していた詩人たちであり、当然、ダンテと共通する美学の持ち主でもあった。また、「他の一人」という言い回しで言及されているのは、ダンテ自身にほかならない。このように、初めて聖なる言葉「エル」を発したアダムから始まった俗語は、ダンテの光輝ある俗語詩に至って完成するのである。その高貴な俗語は、数年後ダンテが綴った『神曲』「天国編」の中で、ダンテと神との出会いを描写するために用いられていることを考えると、やはりダンテ自身の中でその俗語が「聖なる言語」のステータスに昇ったと自信があったかもしれない。

ダンテは、古代ギリシャやローマなど雅語文化の知恵を借りて、その一方で、シチリア詩派や清新体の至上の詩的経験を継承することによって、伝統に基づく正統な俗語を使用している詩人だと自負する。このように『俗語論』で行われた過去文化の厳選、再編集、再創造というプロセスこそは、筆者が「遺産化」と呼んでいるものである。

既述の通り、遺産というのは、ただ過去の文学を保存するのではなく、それを再創造しながら新しい意味と価値を付加するプロセスとして理解できる。「真名序」によると、醍醐天皇が「継ぎたい」、「興したい」としたのは、人麻呂などの和歌という作品、つまりモノではなく、生きている文化としての和歌の「風(俗)」と「道」なのである。

思継既絶之風。欲興久廢之道。(第四節ノ二)

既ニ絶ニシ風ヲ継ガント思ホシ。久シク^{すてれし}廢^{おこ}之道ヲ興サムト欲シタマヒキ。

和歌の復興というテーマは、「真名序」の結末にも繰り返されるが、ここもまた、人麻呂の死を嘆く一方、その「道」、つまり詠歌活動という営為は今ここで生きていると堂々と宣言される。

適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌。嗟乎、人丸既没、和調不在斯哉。(第五節)

適^{たまたま}和歌ノ中興ニ遇^やヒ、以チテ吾ガ道ノ再^{さかり}ビ昌ナルコトヲ樂シム。嗟乎、人^あ磨^あ既ニ没シタレドモ、和調^{ひとまろ}スニ在ザラム哉。

言い換えると、『古今集』が蘇らせたいのは、和歌の伝統ではあるが、ただ仲麻呂と『万葉集』に代表されるテキストそのものではなく、醍醐朝の「今」、実践し続けられている和歌という文化的営為である。この意味で、『古今集』で行われている古歌の復活は、遺産研究によって提案されている文化遺産(あるいは無形文化遺産³³)の新しい概念にちょうど当てはまるのだと強調したい。そして、人麻呂の和歌を「吾が道」と強く主張する「真名序」は、過去文化の私物化の明らかな宣言であるが、これもまた、遺産をめぐる討論における文化の所有性という重要な課題と関わるのである³⁴。

したがって、ここでいう遺産化は、ただ過去の文化に懐かしく憧れる復古主義とは異なり、過去とのつながりを強化することによって現在の活動と自己意識を定める道具である。そして遺産というカテゴリーを活用させることによって、過去と現在だけではなく、未来まで及ぶ視野を得るのである。それは、「仮名序」の次の二箇所に明らかである。

よろづのまつりごとをきこしめず暇^{いとま}、もろもろのことを捨てたまはぬあまりに、いにしへのことをも忘れじ、ふりにしことをも起したまふとて、今も見そなはし、後の世^{のち}にも伝はれとて（第十一節）

歌のさまを知り、言^{こと}の心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、古^{いにしへ}を仰ぎて、今を恋ひざらめかも。（第十二節）

「いにしへのことを」後世に伝えるのは、醍醐天皇の希望であり、『古今集』の編纂の一つの動機でもある。そして、これからも「言の心を」得た後世の人々は、『古今集』の「今」、つまり醍醐朝における和歌のルネッサンスを、永遠のモデルとして眺めるに違いないと述べている。

その後の文学史を俯瞰すると、『俗語論』と『古今集』の遺産化作戦は成功したと確認できる。ダンテの俗イタリア語はイタリアのスタンダードになり、『古今集』の和歌は後の勅撰和歌集にとって必見のモデルになった。そして両方とも、今日のイタリアと日本の文化的アイデンティティを構築する基礎になり、両国それぞれの重要な文学遺産としての役割を果たしているのである。

結論

2021年に、ダンテ・アリギエーリの没後700周年を迎えることをきっかけとして、イタリア政府は3月25日を「ダンテの日(Dantedi)」と制定した。日本では、源氏物語千年紀を記念して2008年から、11月1日は「古典の日」という記念日になった。世界中の各国では、毎年、その国の伝統、歴史、信仰、つまり文化的アイデンティティを強化させるためのイベント、祝日、行儀、催しなどが常々行われている。また、世界の文化のダイバーシティを保護するため、2005年にユネスコ総会において「文化多様性条約」が採択された。このような、文化の多様性に対する注目は、21世紀に入ってからさらに強化されたと思われる。1952年の論文「Philologie der Weltliteratur」（世界文学の文献学）でエーリヒ・アウエルバッハが恐れていた「多様性の消失」は、一旦スピードを落としたようである。しかし、アウエルバッハの論文の結末に記された注意の言葉、「文献学者が受け継ぐ最も貴重で欠かせないものは自国の言語と教養（Sprache und Bildung）である」³⁵は今日も有意義であろう。

文化を受け継ぐことは、遺産／heritageという言葉で表現されるようになったが、文化遺産の創造と継承は、現代のみに属するものではない。本稿では、ダンテの『俗語論』と紀淑望の「古今和歌集 真名序」を比較することによって、9世紀日本と14世紀イタリアで行われた俗語正統化の共通点を確認し、その言説を「遺産化」として捉え直した。自然性などの過去の理論を受容し、俗語（文学）の歴史を語り直し、過去の優秀な歌人詩人のモデルと同一化することによって、ダンテと淑望は過去の文化に基づく新しい文学の権威を宣言する言説を作成した。

アウエルバッハが重視した言語と教養、つまり文化と伝統の知識は、ダンテと淑望にとってもそれぞれの国の文化の最も重要な部分だったと想像できる。ダンテの俗イタリア語の探究と淑望の「吾が道」は、国民意識

33 文化遺産の新しい概念については、Laurajane SmithとNatsuko Akagawa共編『Intangible Heritage』（Routledge、2008年）と、Laurajane Smith『Uses of Heritage』（Routledge、2006年）を参照されたい。

34 この「吾が道」を論じるところにDenecke（前掲2008年、373頁）は「cultural heritage」という英語を使っているところにも注目したい。

35 Walter MuschgとEmil Staiger共編『Weltliteratur: Festgabe für Fritz Strich zum 70. Geburtstag, 1952年』49頁。和訳：高木昌史等共訳『世界文学の文献学』みすず書房、1998年、417頁。

成立の初期段階として認められるが、それは同時に両国の文化遺産史の重要な出来事でもある。一方、「自国」という意識を表しながら、その意識に形を与えるために、国境を超える言語と文化（漢文とラテン語）は不可欠であることも確かめられた。

漢文は、欧州におけるラテン語と同様に、東アジアの共有文化遺産であったはずだが、現在ではその意識を社会に普及させることは容易ではないだろう。しかし、『俗語論』も「真名序」も、ラテン語と漢文無しに綴られることはなかったという事実は、一国の文化に対する現代の常識を改める刺激にもなるかもしれない。そうすると、イタリア文学と日本文学は、ラテン語文学と漢文学の上に付随してあるのではなく、ラテン語文学と漢文学という文化遺産を私物化したからこそ、成長して、盛んに独自の文化を生み出し得たものと考えられる。